

2011年6～7月の放射線量測定の結果、見えてきたこと（福島県白河地域）

1. 土壌、草地は舗装路面より放射線量が高い。
2. 特に放射線量が高いのは側溝や水溜まりである。
3. チェルノブイリでは、舗装道路の亀裂部分から雑草が生えているところは雑草から高い放射線量が検出されたが、福島では今のところはっきりしない。
4. 風が吹き抜けず、溜まりやすい地形のところは放射線量が高くなりやすい。
5. 公園、砂場、グラウンドなど、子どもたちが好んで行く場所と放射線量が高い場所が一致している。
6. 雨が降った翌日は空間線量が下がり、土壌線量が増える傾向が見られる。この傾向は小雨の場合ははっきりしない。全般的に空中を浮遊している放射性物質が雨により降下していることがはっきり見える。
7. 雨の場合と異なり、強風が吹いた翌日の放射線量は大気中、土壌ともほとんど変化が見られない。
8. 放射性ヨウ素 131 は半減期が8日間と短いので、これが主体であれば日を追うごとに大気中放射線量の減少が見られるはずだが現状はそうになっていない。この原因は、
①福島原発事故が収束せず、日々新たな放射性ヨウ素 131 が放出され続けている
②半減期が30年のセシウム 137 が大気中を浮遊する放射性物質の主体となりつつある
——の2つの可能性が考えられる。現状ではこの両方が作用しているのではないか。
9. 木造家屋より鉄筋コンクリート造住宅のほうが放射線の遮蔽効果が高い（木造家屋は屋外の約2分の1、鉄筋コンクリート造住宅は屋外の約10分の1）。
10. 室内の換気をした場合、しない場合に比べて室内の放射線量は0.05～0.06 μ Sv/h程度上昇する。エアコンを使用した場合も同様の結果が見られる。
11. 6月初旬頃から測定場所1における土壌の放射線量が増え始める一方、大気中放射線量はほとんど変化がない。また測定場所2では、土壌のすぐ下がコンクリートの基礎になっているためか、土壌のほうが大気中より放射線量が低い傾向が見られたが、6月中旬頃からここでも土壌のほうが大気中より放射線量が高くなる傾向が見られ始めた。測定場所1、2の両方とも、土壌の汚染が日を追うごとに進行している様子ははっきり確認できる。
12. 「福島原発事故は収束に向かっている」「汚染は改善している」などという御用学者の見解が時折メディアで流れるが信用してはならない。起きている事態は全く逆であり、土壌の汚染は日を追うごとに進行している。放射性物質の漏出が止まらなければ、この事態に歯止めはかけられない。今後の風向きや天候にもよるが、東北、関東の全域で土壌の汚染は日々進行しているという厳しい現実を認識すべきである。

2011年10月の放射線量測定の結果、見えてきたこと（福島県白河地域）

1. 6～7月頃と異なり、雨天の後も放射線量に有意な上昇が見られなくなった。雨中への放射性物質の混入はほとんどなくなってきたと考えられる。
2. 舗装路面上の放射線値は低下、土壌は上昇。次第に舗装路面と土壌の放射線量の差が拡大している。また、土壌では高さ10cmのほうが高さ100cmの放射線量を大幅に上回っているが、舗装路面上では高さ10cmと100cmにほとんど差がない。
3. これらの測定結果から以下の点が読み取れる。
 - ①土壌への放射性物質の蓄積量は増えている
 - ②舗装路面上には放射性物質はほとんどなく、周辺の土壌中から放射された γ 線のみが計測されている（そのため高さによる差がない）。
 - ③土壌中にはセシウムだけでなく、ストロンチウム（ β 線のみ放射）などの危険な核種が大量に蓄積している（約100m先まで放射される γ 線と10cm程度しか放射されない β 線との差が、10cmと100cmの放射線量の差となって表れている）。